高校英語科における教科書を使った話すことの指導の提案
～教師と生徒と教材が対話する～

言語文化系教育サブプログラム（英語）

藤田涼太郎

【指導教員】　及川賢　奥住桂　武田ちあき
【キーワード】言語活動　発問　対話　教材研究　CLIL

１．はじめに

コロナウイルスパンデミックから学校現場では、生徒一人一人にタブレットの配布やGoogle MeetやZoomなどを使ったオンライン授業が普及した。その中で、英語教育界では、AIによる翻訳機能やチャットGPTの使用についても検討されている。佐藤(2023)では、2023年1月に全国の複数の大学に所属する18歳から22歳の日本人大学生200名、および公立小学校、私立小学校、中学校、高等学校の英語担当教員 123 名を対象に調査を行った。その結果、機械翻訳が授業に導入されても 82.5%の英語学習者が英語学習は依然として必要であると回答した。このことから英語学習の重要性は変わらないことが示された。特に「話すこと」の領域は、機械学習に代替できないものであると考えた。基本的にコミュニケーションや対話は人と人とのやり取りで行われ、AIや機械翻訳には対話の場で生まれる雰囲気や、人の表情から読み取るコミュニケーションは未だ不可能であると考える。

また、学習指導要領英語編の目標内には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」について述べられている。その中で「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」が求められている。具体的に「コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」とは、多様な人々との対話の中で、目的や場面、状況などに応じて、既習のものも含めて、習得した概念（知識）を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、課題を見いだして解決策を考えたり、身に付けた思考力を発揮させたりすることとしている。

今後は英語を学ぶことだけでなく、他者とのコミュニケーションや対話を通して、外国語の背景にある文化や、社会や世界に目を向けていく必要があるだろう。そのためには、話すことや対話を通して、言語としての「英語」だけでなく、学習の「中身」にも目を向け、考えを深く広くもてるような教育が重要であると考える。

その中で、CLIL（内容言語統合型学習）は、学習内容を英語で学ぶ代表的な方法だが、CLIL 専用の教材を使用することが多く、一般的な高等学校では実施が難しい場合がある。また、最近では教師の多忙化も問題となっていて、授業準備以外の事務作業に時間を取られ、教材研究に十分な時間を割けない現状がある。これらを踏まえ、教師の負担を軽減し、授業に言語活動を気軽に取り入れる方法を模索する必要がある。

２．小・中・高の英語科における「話すこと」の授業

ここでは各校種で話すことにおける「やり取り」と「発表」の目標がどのように設定されているかを確認する。

まず小学校の外国語活動の「話すこと」の目標について見てみよう。ここでは以下のように設定されている。①基本的な表現を用いて、挨拶や感謝、簡単な指示をしたり、それに応じたりする。②自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちを簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合う。③ サポートを受けて、自分や相手のことや身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を使って質問したり、質問に答えたりする。また、「発表」に関しても同様の内容が設定されている。

次に小学校の外国語科における話すことについて確認しよう。こちらも次のように記されている。① 基本的な表現を用いて、指示や依頼をしたり、それに応じたりできるようにする。② 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちを簡単な語句や基本的な表現で伝え合えるようにする。③ 自分や相手のこと、身の回りの物について、簡単な語句や表現を用いてその場で質問し、答えたりして伝え合うことができるようにする。話すこと「発表」の目標では以下のように設定されている。① 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や表現を使って話すことができるようにする。② 自分のことについて、伝えたい内容を整理して、簡単な語句や表現を使って話せるようにする。③ 身近な事象について、自分の考えや気持ちを簡単な語句や表現を使って話せるようにする。

外国語活動と共通している点は、身近な事柄について自分のことを簡単な英語で表現することである。

小学校では、スモールトークなどを用いて自由に話す時間が設けられている。スモールトークは一般的には「世間話、雑談」という意味で使用されるが、ここでは「教師が生徒にとって身近な話題（here and now）や関心を持ちそう

な話題について英語で話す時間」として、授業開始時のウォーミングアップとして使われることが多い。教師が英語で話し始めることによって日本語モードから英語モードに切り替えやすくなり、英語を聞いて理解する姿勢と能力を育てる効果があると言われている（白畑他,2019,pp.245-275）。また、スモールトークは必ずしも授業の最初に行うものではなく、英語で表現する活動に重きを置いたものと考えられる。このように、小学校では多くの学校でスモールトークが行われている。

次に、中学校の話すことについて見ていこう。中学校では「やり取り」として以下の目標が設定される。① 関心のある事柄について、簡単な語句や文を使って即興で伝え合うことができるようにする。② 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手の質問に答えたりすることができるようにする。③ 社会的な話題について、聞いたり読んだりしたことを基に、考えや感じたこと、その理由を簡単な文を使って述べ合うことができるようにする。

また、話すこと「発表」においては「やり取り」とほぼ同じ内容になっている。

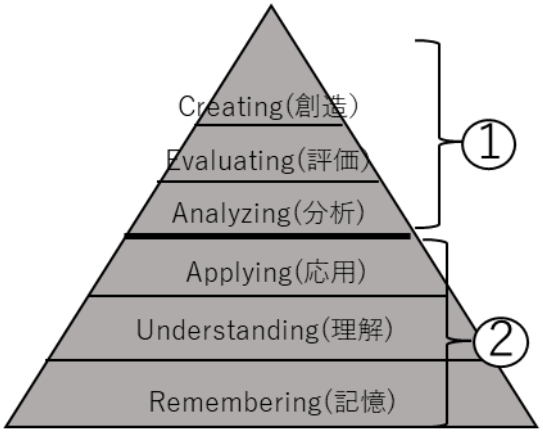
次に高等学校の「話すこと」を見てみよう。高等学校の「やり取り」は以下の目標が設定されている。① 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を使って情報や考え、気持ちを話して伝え合うことができるようにする。② 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、情報や考え、気持ちを論理的に話して伝え合うことができるようにする。発表においても以下のような目標が設定されている。① 日常的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を使って情報や考え、気持ちを論理的に話して伝えることができるようにする。② 社会的な話題について、使用する語句や文、事前の準備などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、情報や考え、気持ちを論理的に話して伝えることができるようにする。

中学校や高等学校になると、英語の難易度も上がる中で、日常的なことや社会的な話題について話すことが求められ、特に高等学校では、論理的に整理をして発表をすることが目標として設定されている。

どの校種についても「話すこと」の目標から、生徒が身近なことや社会的に話題について、自分の考えや気持ちを英語で表現をすることが求められていると考える。特に高等学校では、内容が難しく、社会的な話題について考えることが求められるため、スモールトークのような活動はあまり行われないことが多い。むしろ、ディベートや発表といった活動が中心になる。また、高等学校によってはスピーチコンテストが行われることもある。このように小学校から高等学校にかけて、「話すこと」が英語教育において重要な役割を果たしていることが分かる。

次に、「話すこと」における思考、対話、信頼関係について考えたい。「話すこと」を通じて生徒の思考を深めることが重要である。ブルームによれば、思考には浅い学習（知識の理解や暗記）と深い学習（学んだことを既存の知識や経験と結びつけ、批判的に考察する）がある。

図１ ブルームの思考による分類（渡辺他,2011）

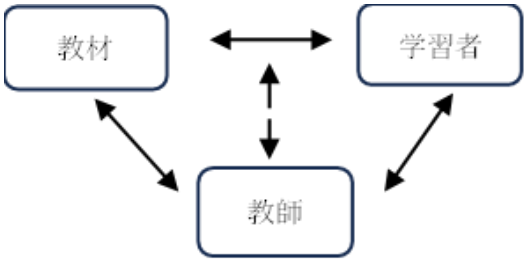


思考を分析すると、記憶（暗記・再生）、理解（解釈・説明・要約）、応用（実践）、分析（分解・位置づけ）、評価（判断・批判）、創造（計画・創出）の順で難易度が高くなる。この分類は、LOTS（低次の思考力）と HOTS（高次の思考力）に分けられる。日本の英語教育はこれまで LOTS に偏重していたが、今後は HOTS へのアプローチが重要となる。

次に対話「語り合い」である。多田（2017）は対話を、「自己や他者、様々な対象と語り合い、差異を生かし、新たな知恵や解決策を共に創り、良好な関係を構築していく活動」と定義している。教育における対話の対象は人間だけでなく、教材や教師も含まれる。

また、三野宮（2014）は、対話の重要性を「教師が学習内容を理解し、学習者とつなげること」と説明している。生徒は教材と対話をし、思考を深め、教師と生徒は対話を通して内容を深く理解する。この対話が「話すこと」において非常に重要である。

図２　教師―学習者―教材の関係　（Lampart2001,p.33）



最後に、信頼関係について考える。中井（2009）は、教師が生徒の信頼を得るためには「安心感」と「役割期待」を高め、「不信」を低減させることが求められると述べている。特に「話すこと」においては、生徒と教師、生徒同士が気を

許した状況で対話を行うことが重要である。

「話すこと」の目標に基づき、生徒の思考を育み、教師と生徒、生徒同士のコミュニケーションを意識した言語活動を高等学校でも取り入れていきたい。そのためには、教科書を使った言語活動を考えていく必要がある。本稿では、中・高の英語授業を分析し、授業展開において重要な点を多角的に考察していく。

3. 高校英語科における話すことの重要性

言語活動を高校にも気軽に入れられ、また教科書に基づいて意見を言い合い、考えを深く掘り下げられるような授業づくりが必要であると考えた。ここからは教科書を用いて高次の思考を促せるような言語活動について考えていくことにする。

3.1 授業分析

今回は文部科学省が公開している高等学校と中学校の授業を視聴した。話すこと「やりとり」において、教師が教科書を使い、教科書の内容をより深く考えられる授業をピックアップした。視聴した授業の特徴は以下のとおりである。

・中２①「話すこと〈やりとり〉」教師の指導力向上に向けた実践例(1)～教育目標　話すこと「やり取り」～,津市立久居中学校
・中3①「話すこと【やり取り】」教師の指導力向上に向けた実践例(2)～教育目標　話すこと［やり取り］～,笠間市立笠間中学校
・中3②【話すこと[発表]】教師の指導力向上に向けた実践例（３）～領域目標　話すこと[発表]～,信州大学教育学部附属長野中学校
・高１①「話すこと【やり取り】」の言語活動を取り入れた「読むこと」の指導(Post-reading activity),茨城県立竹園高等学校
・高1②【発信力】読んで話して、書くことへ～パラフレーズを意識させた発信力育成の授業～,宮崎県立宮崎南高等学校
・高2①「生徒の英語による発話を引き出す教師と生徒とのやり取り」,東京都立本所高等学校
・高２②読んだことから話すことへ,埼玉県立坂戸高等学校

以上の授業を視聴して各授業がどのような特徴があるかを分析する。

中2①の授業では、最初にどのような内容であったかを話す時間がある。リテリングとは言い切れないが、単語や短い文で内容を伝える活動がみられた。その後にストーリーの内容から“Kindness”をキーワードとして自分の経験を発表するという活動につなげていた。そこには準備する時間はなく、即興的に行うことができていた。また、生徒一人にデモンストレーションをお願いし、どのようなことに注意をして発表を行うかを内容面でも中間指導をされていた。

中3①の授業では、“Why do we import things like food, clothes and electronic devises?”という推論発問をし、生徒たちに考えさせていた。生徒たちが言えない表現や単語を教師が中間指導している場面も見られた。その後の「笠間市の市長になったときに、台湾との交流が多い笠間市でどのような政策をするのか」、という発問に移る。先ほどの評価質問からさらに深く、自分として何ができるかということに足を踏み入れている。これはCLILの中のCommunityでいうと、地域という輪までに内容を広げられていることにもなる。

中3②の授業では、生徒がシェアをするということに加えて、先生が授業に参加するような授業であった。教師も生徒がシェアしていることを聞き、時には質問や全体への投げかけを行っていたことが特に印象的であった。発表者は自分のことについて全体へと意見が広がるとともに、さらに深い評価発問を教師がすることでその子への役割期待がみこまれると考えた。シェアは2回行われ、一回目が終わったタイミングで中間指導を行っていた。そこでは主に単語や、語彙についての指導を行っていた。

高1①の授業では、自分の考えを「即興」をテーマに話す活動を取り入れていた。最初は原稿を読んでしまっている生徒がいるが、教師は原稿を読まないようにということや、コミュニケーションの相手が人であることから、パートナーと話をするということを活動中に何度も呼び掛けていた。また、メモを取る活動も行っていて、話すことだけではなく、自分の大事であると思ったことをメモする力、そして相手のことをしっかり聞こうとする態度なども養うことができると考える。

高１②の授業では、パラフレーズするということに重きを置いていた。確かに難しい内容やテーマについて話すことも多い高校生の英語の授業で、自分が伝えたい単語が難しく、聞きなじみのない単語も多くある。自分が言える言葉で置き換える練習は、話すことにおいても重要で、相手にもわかりやすい英語を使えるようになると感じた。これは話すことにおける足場掛けを授業全体で行っているとともに、そこから各活動にもつながる一貫性がある授業であると感じた。

高2①の授業では、中間指導というよりも、教師と生徒とのコミュニケーションや対話の中で必要なことを足場掛けし、補足をすることが殆どであった。何か活動の間に指導を入れてもう一度その活動に取り組むことは行ってはいなかったように見えた。

高２②の授業は、高等学校の授業でもあるため、「持続可能な社会」という社会的なテーマについて取り上げられていた。そこではロールプレイングとして自分の意見を言うという活動が行われる。自分たちが学んだことからさらに深く考えることができていた。しかし、そこへの段階的な指導として、教師とALTのモデルトークや使える表現、話を構成するための足場掛けも行われていたと考える。しかし、難易度は高いため、学校によっては中間指導や足場掛けが

より必要になる可能性もあると考える。

これらの授業を視聴して得られたことから、「発問」「中間指導」「自分事として考える」「足場掛け/リテリング」の観点で授業を分析する。実地研究や授業研究会等で、発問や中間指導の上手な先生方の授業をみると、生徒にとってはより高次の思考を育成できているのではないかと考え、授業の観点に挙げている。また、「自分事として考える」と「足場掛け/リテリング」に関しては、ドルニェイによる英語指導における生徒への動機づけとして、MOLT という授業分析に使われたものの中の Personalization と、段階的なアプローチを挙げている。今回の自分事として考えることはドルニェイの考える Personalization、また、足場掛け/リテリングは段階的アプローチに重ねて考えることにする。

3.1.2 発問

今回は中・高の様々な英語科の授業映像を大きく 4 つの側面から考えていきたい。

まず一つ目に発問についてである。田中他(2011)では、発問は大きく三つの種類に分類される。最初に「事実発問」がある。これは基本的に教科書の文章中に書かれた情報を読み取らせる発問である。具体的に高 2①の授業では、教科書の内容に合うものを答えるという発問がある。これは事実に基づいた発問であり、答えが存在する「事実発問」の一例である。次に「推論発問」である。これは、文章中には直接書かれていないが、文章や読者の持つ背景知識から推測させる発問である。具体的に中 2①では、"A Glass of Milk" という物語を読んだときに、生徒に What do you think?と聞く場面があった。教師は直接的に Kindness というテーマを言うことなく、生徒自身が文章から Kind や Nice story と推測して解答をすることがわかる。最後に、「評価発問」である。評価発問では、文章内容・話題に対する読者の考えや態度を表明させる発問である。具体的に、中 3①の授業では、「自分が実際に市長になったときにはどのような政策をしたいのか」という発問があった。ここでは、自分自身がどう思うか、どう考えるかを英語で尋ねている。これらの中でも、特に推論発問や評価発問は高次の思考を促すものになると考えられる。生徒自身の経験や意見、そして得た情報から思考し、判断する力が養う発問ではないかと考える。また、三つの発問以外にも発問をする教師側が気を付けるべきことがいくつかある。

山口(2024)によると、興味を引く発問や題材が必要であると考えられている。これは生徒の身近に考えられる話題であるかということである。例えば、学校行事に合わせて授業内容を変更するなど、学校生活と授業が結びつくことで生徒たちはより具体的に、そして深く内容について考えることができると考える。次に場面や状況の重要性である。場面や現実性を考慮し、はっきりと生徒に分かりやすく伝えることが求められる。三つ目に、生徒の既存知識を生かすことである。英語の既存知識ももちろん、他教科でも培った知識も活用することが大切である。他教科の知識をも活用することで、より教科横断的な授業を展開できるようになる。最後に、教科書の世界をより現実にすることである。これは、社会との関連を強調するということである。現代の社会で起きている問題を教科書で扱うことが多く、こうした内容を学ぶことで、生徒は現実的な視点をもって教科書の内容を学び、学んだ内容について意見を述べたり議論したりすることができるようになる。

3.1.3 中間指導

中間指導について、蓬澤(2022)によると、「表現内容の適切さ」と「英語使用の正確さ」の指導が必要とされている。「表現内容の適切さ」とは、目的や場面、状況に応じた発話内容になっているのかを確認することである。具体的には、生徒の発話を例示し共有しながら、どの点が良いのか、相手により効果的に伝えるために工夫できる余地があるのかを考えさせることである。また、「英語使用の正確さ」では、生徒の発話を受け止め、その中で単語だけの発話を文にしたり、語順の誤りを修正したり、日本語の発話を英語に直させたりすることである。これらの中間指導の目的は「伝えたいことがあるけれど、うまく伝えられない」、「ああ、そうやって英語を使えば伝えられるんだ」という気付きを生徒自身に促し、できなかったことをできるようにすることが求められる。具体的には、中 3②の授業では、生徒がシェアした意見に対して、教師はメモを取り、その中での単語や言い換えなどの言語面でのフィードバックを行っていた。これにより、他の生徒も気づきを得ることができている。また、中 3①の授業では、内容面で自分の言えないことを全体にシェアし、生徒に投げかけている場面も見られた。

中間指導の際に気を付けるべき点は三つある。蓬澤(2022)よると、まず初めに「正しい」「良い」と言わないことである。教師自身が「こうするといい」と言うと、生徒は「先生」の言う通りにしなければならないと感じてしまい、思考が縛られる可能性がある。次に「なぜ」を大事にすることである。生徒に活動をやらせるだけでなく、うまくいったりいかなかった時に、「なぜ」と問いかけることで、生徒たちは次の活動でどのように伝えるべきかを考え、思考の変化が促される。最後に生徒同士で行う中間指導である。生徒同士が中間指導を行うことで、彼らは自発的に気づきを得るとともに、相互に学び合うことができる。これらの要点はすべて「生徒の言葉で授業を作る」という考えに基づいている。「生徒が躓いたとき」にどのように発問や投げかけをするのかは非常に重要であると考える。

3.1.4 自分事として考える

静岡県教育委員会(2023)によると、主体的に学ぶ姿勢を養い、「生きる力」を育んでいくためには、学習の内容や活動を自分のこととして捉え、人生や社会、生活と関係づけたり、他者と関わったりしながら学びを深めていく「自分事としての学び」が重要になる。そのためにも教師は子供が学び

を自分で調整する「個別最適な学び」と、探求的な学習や体験活動等を通して多様な他者と協働や対話をしながら資質・能力を育成する「協働的な学び」の一体化を図る必要がある。「自分の事としての学び」では、例えば次のような子供の姿が考えられる。① 興味・関心を持ち、既有の資質・能力や学習に関わる経験などを働かせながら、学びの対象に対して自分なりの問いを持ったり考えを深めたりしている。②「個別最適な学び」と「協働的な学び」を繰り返しながら様々な考えに触れ、自らの問いや考えを広げたり深めたりしている。③自らが学習方法を計画したり、決定したり、振り返ったりしながら学んだことと人生や社会、生活等とのつながりに気付き、新たな問いや考えを持っている。

つまり教師は、育成を目指す資質・能力を的確にとらえて単元や題材を構想すること、子供の思考過程を生かして授業を展開すること、子供の資質・能力の伸長を様々な方法で見取り、子供と共有することを通して子供たちの一人一人の学びを保証し、多様な視点や自身の問いや考えを持つことが可能になる。

3.1.5 足場掛け(scaffolding)・リテリング

足場掛けは英語教育に限らず、様々な教育の場で重要とされている。ここでは英語教育における「足場掛け」について考える。足場掛けという言葉の意味は白畑他(2019)によると、学習者が一人では解決ができない問題に対して、他者の支援があれば解決ができる場合、その支援は建築作業を支える足場のように機能することから、足場掛けと呼ばれる。ここでは英語の授業における足場掛けについて考える。英語学習に必要な足場掛けの具体例として 3 つの方法を紹介する。

上山(2022)では、まずが視覚的な足場掛けが重要だと述べている。口頭で理解が難しいもの、イメージしにくいものに対して、視覚的に文字や写真、イラストなどでサポートすることにより、学習者がよりイメージを持ちやすくなり、知識定着に役立てることができる。次にジェスチャーである。言語活動において、伝えたい内容に加えて、身振りや手振りで相手に伝えることができると考えられる。ジェスチャーなしでの会話やジェスチャーを加えた会話では、生徒の伝えやすさや、言語で伝えるか、ジェスチャーを通して伝えるかに違いが出るため、コミュニケーションの質にも大きな影響を与える。三つ目に理解度の把握である。3.1.3 で触れた中間指導は、この足場掛けにも含まれるかもしれない。生徒がどれほど理解しているかを把握し、その理解度に応じて言語や内容面で適切な支援を行うことで、生徒の学習定着や思考に良い影響を与えることができるのではないかと考える。高 1②の授業では、どのように自分の言葉に言い換えることができるのかについて、教師は生徒が言えるように足場掛けを行っていた。これは言語面の中間指導の一部ともいえよう。

子どもが学習でつまずいたり行き詰まったりする場合、足場掛けが不十分の可能性がある。そのため、視覚的支援やジェスチャーをつけて指示をしっかり行い、子どもがどれだけ理解しているか把握する必要がある。生徒たちが安心して、目標に向かって一歩一歩確実に前進できるように足場掛けは言語活動においても重要であると言える。

またリテリングも足場掛けの一つになり得る。リテリングは、発表や何かを話すことにおける段階的指導にはとても効果的であると考えられる。教科書の内容をまとめて表現をすることに、生徒たちに慣れてもらう。初めはメモを用意し、メモを見ながらでも構わない。リテリングは段階的に行い、最終的には絵やキーワードだけで物語を要約できることを目指す。生徒のレベルに応じて、キーワードの有無や、準備の時間の短縮などを調整することも可能だ。このような活動は、自分が言いたいことを話す練習になり、リテリングに自分の意見や経験が加わることで、教科書を基に自分の意見を構築し、話す力を養うことができると考える。

4. 授業分析から考察へ

ここまで 7 つの授業について分析を行い、その中で 4 つの観点について 3.1.2 から 3.1.5 に亘って見てきた。「話すこと」において、視聴や分析をする中で特に「発問」と「自分事として考える」という観点はより重要であると考えた。図 3 ではそれぞれの授業と観点を表にしたものである。その際、中間指導においては言語面でのものと内容面でのものとを別で考えることとする。〇と×の基準としては、一度でも授業内で触れている場合は〇とし、一度も触れなかったもの、またその活動に近いがその活動とは言えないものを×とする。×であるということから授業が良い悪いというものを判断するものではない。授業名は 3.1 に記載の通り、中 2①のように記載する。

図3　授業と観点

授業/観点	事実発問	評価発問	推論発問	自分事として考える	中間指導（内容）	中間指導（言語）	足場掛け	リテリング
中 2①	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	×
中 3①	〇	〇	×	〇	×	〇	〇	×
中 3②	×	〇	×	〇	×	〇	〇	×
高 1①	×	〇	〇	〇	〇	〇	〇	×
高 1②	〇	〇	〇	×	×	〇	〇	〇
高 2①	〇	×	〇	〇	×	×	〇	×
高 2②	〇	〇	×	〇	〇	×	〇	×

5.話すことの授業実践と実地研究から

ここからは実践例を通して、実際にどのような言語活動をいくつかの教科書を基に提案したい。その際、教科書は主に検定教科書を利用する。ここでは検定教科書である「Grove English CommunicationⅡ」および「ELEMENT English CommunicationⅠ」を基に授業提案を行う。ここでは極力学校の学力差を考慮せず、気軽に話し合えることを念頭に授業提案を行う。ただし、今回は話すことの活動に重きを置くため、細かい文法指導や発音指導等の工程は省き、その点は流れのみを記載する。対象学年は高校1年生、2年生とし、それぞれ学力が低い学校でも対応できるような授業案に仕立てることを目標とする。

5.1 Lesson2「Love beyond Species」～ELEMENT English CommunicationⅠ～

ELEMENTでは、見開き一ページの分量の英文となるため、分量が多く、内容も少し難しい。その中でも、生徒が身近に感じられるような発問が必要となる。

【授業計画】

1.2時間目

＜導入＞

文章を読む前の評価発問

・Have you ever had animals in your house? If not, what animals do you want to have?

・単語や文法の説明と長文の確認（訳先渡し）

・文章の音読などをしてリテリングにつなげる。

・教科書のOverview, Main Idea, Details Deeper Understandingの実施（事実発問、推論発問）

3.4時間目

・リテリング

・日本でクマに襲われて死亡した男性の話を読む

As the bear grew larger, its living conditions may have become unsuitable, which could have led to the attack. Bears are wild animals, and keeping them as pets can be dangerous if proper care is not provided.

The local police and animal protection groups are investigating the incident, including the bear’s health and how it was being cared for. This tragedy has raised concerns about the dangers of keeping wild animals as pets, and it may lead to stronger regulations and safety standards in the future.

ニュースを基にChat GPTで作成<学力に応じて注を用意する>

評価発問

・If you were asked to have wild animals like lions or bears, would you agree or disagree with the idea? If you disagree with that opinion, under what circumstances would you consider keeping such animals?

基本的に話すことではメモを用いない。最後の評価発問については少し考える時間を与えるが、メモ程度を許可し、文章を書いたりすることはしない。まず自分で考え、ペアで話し合いを行ったのち、中間指導を挟んで全体へ共有できるとよい。また、その後は書く活動に繋げることも考えられる。3・4限目は難易度が高いため、活動に様々な足場掛けが必要な場合もある。しかし、1・2限目の評価発問では、特に学力に関係なく、文で自分自身の考えを表現できなくても、自分の考えを単語やジェスチャーなどを用いながら表現できていればよい。

5.2 Lesson6「Our Advanced Network Society」～Grove English CommunicationⅡ～

Grove English CommunicationⅡでは、レッスンが4つのパートに分かれている。また、各パートに問いが設定されているため、それを授業の最初に問いかけ、意見の共有を行った後に本文理解に入るとよいと考える。今回はPart1からPart4までの授業構成と、レッスンを通してのまとめの活動を考える。パートごとの文章の分量は多くないため、話す活動を取り入れやすく、また、内容に関しても身近に考えられる内容であるように感じられる。

〈Part1〉1時間目

導入（評価発問）

How do you use digital devises every day?

Part1の単語、音読等の本文理解（訳先渡し）

Check your understanding （事実発問）

Rivew the contents

まとめ（評価発問）

What kinds of digital devises do you use?

How long do you use smartphone? And what apps do you use?

〈Part2〉 2時間目

導入（評価発問）

Do you really know about the Internet world?

・Part2の単語、音読等の本文理解（訳先渡し）

・Check your understanding（事実発問）

・Rivew the contents

・まとめ（評価発問）

Have you ever had a scary experience on the internet? If you can, please share it. Are there any things you are particularly conscious of, when using social media or the internet?

＜part3＞ 3時間目

・Part3の単語、音読等の本文理解（訳先渡し）

・Check your understanding（事実発問）

・Rivew the contents
・まとめ（評価発問）
Think and share！に基づいて
Do you have an OoT device at home? What is it?
If you don’t have, please tell me the devices that you want.

＜part4＞　4時間目
Part4の単語、音読等の本文理解（訳先渡し）
・Check your understanding（事実発問）
・Rivew the contents
・まとめ（評価発問）
"The Future and Challenges of Self-Driving Cars"
Self-driving technology has the power to change how we travel. Using AI (artificial intelligence) and sensors, this technology allows cars to drive themselves. It can bring many benefits, such as reducing accidents, easing traffic jams, and helping elderly and disabled people travel.
However, there are several challenges to making this technology widely used. First, there are technical problems. Self-driving cars use sensors and cameras to understand their surroundings, but they may not work well in bad weather, such as rain, snow, or fog, or when there are obstacles on the road. Also, it’s not clear if AI can handle unexpected situations, like sudden accidents or traffic problems. Second, there are legal issues. If a self-driving car causes an accident, who is responsible? In current laws, the driver is held responsible, but with more self-driving cars, it’s unclear how the rules will change.
Lastly, there are concerns about security. Since self-driving cars are connected to the internet, there is a risk of hacking. If someone takes control of the car, it could cause serious accidents, so strong security measures are needed.
教科書を基にChat GPTで作成＜学力に応じて注を用意する＞

評価発問
・What do you think of autonomous driving systems? Tell me the future society that Ai can do?(If there is something that is impossible but you wish you could happen, please share it.)
パートごとに教科書について考えることができ、また、チャットGPTを用いて教科書に踏み込んだ内容を作り、生徒たちがその話題について話すことも可能である。もちろん、生徒層によっては難しい部分もあるため、注意が必要である。

6.授業提案を通して

様々な観点から授業を分析し、授業提案を行った。自分が感じていた高等学校での話すことの活動が少ないという問題から、いかに話す活動を授業内で作るかの重要性に気づくことができた。しかし、現場では、以前自分が考えていた時よりも話す活動が増えてきているように感じられる。しかし、教師の多忙などを考慮すると、教材と向き合える時間はあまりにも少ない。その中で、生徒の思考を深め、また話す活動を増やすことが今後は必要となるのではないかと考える。自分自身で提案を行う中で、生徒たちが「英語」だけではなく「内容」に向き合ってくれるような授業を展開することの重要性について考えることができた。また、学校のレベルも様々な中で、どの程度の足場掛けが必要かは、生徒の様子やクラスの雰囲気を考慮する必要がある。しかし、どの学校であっても「話すこと」の活動の時間を今以上に作り、生徒自身が考えられるような発問や、話せるような足場掛けがあれば、生徒が英語を話せると実感できるのではないかと考える。また、今回の授業分析では中学校の実践も多く取り上げた。公開されている授業を見ると、中学校の授業が圧倒的に多く、話す活動を取り入れている授業も多い。そのため、中学校の英語レベルを使って、十分に話す練習を高等学校で取り入れることも一つの視点として考えるべきだと考えた。

7.終わりに

今回は「話すこと」をテーマに、様々な観点から授業の分析や提案を行ってきた。話すことの授業では「発問」「自分事として考える」「中間指導」「足場掛け」という要素に加え、生徒と教師の信頼性などがとても重要であることを再認識した。小学校でのスモールトークや中学校での話すことの活動を見ていくと、生徒同士、また教師と生徒の対話はもちろん、教材とも向き合っている姿が見られた。高等学校でも、気軽に話せる活動を教科書を使って行うことは、教師としても、生徒の思考力向上に向けて有効的であると考える。自分自身が実地研究および英語教育学会で考えた「話すこと」をより身近に生徒が考えることのできる、学校に合った授業を今後も探求していきたい。

8.参考文献

上山晋平(2022)「目指せ！英語授業の達人43 R&SP Retelling & Short Presentation 話すことの前のリテリングの活動」.明治図書
奥住桂・上山晋平・宮崎貴弘・山岡大基（2022）「目指せ！英語授業の達人42　至上の英語授業づくり＆活動アイデア」.明治図書
川村詩織(2023)「教科書の登場人物に手紙を書こう」『新英語教9月号』，高文研，p.26
北田奈緒子，西村公孝(2021)「対話的な学びを目指す授業実践とその考察」『鳴門教育大学授業実践研究-授業改善をめざして-』20 pp.123-130.
工藤泰三(2024)「授業での発問、どんな工夫が必要？」『新英語教

育三月号』, 高文研, pp.38-39
佐藤眞理子(2023)「機械翻訳と共存する英語教育―抵抗感と学習意義の変容についての分析―」『メリディアル教育研究』17,pp.1-10.
三野宮春子(2014)「授業談話を変えるアクティビティ開発：教師が手作りする授業」『神戸市外国語大学研究叢書』56 p.66
静岡県教育委員会(2023)「令和版 じぶんごと（自分のこと）として学ぶ子供」02hontaioyobia3ban.pdf,（参照 2024-01-02).
志村・山下・臼田・横山・萬谷・や嘉村・竹内・河上(2015)「小学校外国語活動教材と中学校英語教科書のコミュニケーチョン活動の比較」『小学校英語教育学会誌』15 pp.112-124
白畑知彦・冨田祐一・村野井仁・若林茂則(2019)『英語教育用語辞典第三版』.大修館書店
ゾルダン・ドルニェイ(2005)『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』大修館.
田中武夫・島田勝正・紺渡弘幸(2011)「推論発問を取り入れた英語リーディング指導」三省堂.
多田孝志(2017)『グローバル時代の対話型授業の研究 実践のための１２の要件』,p63,東信堂.
中井大介・庄司一子(2009)「中学生の教師に対する信頼感と過去の教師との関り経験との関連」『教育心理学研究』57 pp.49-61.
羽野祐司(2023)「対話で深める読み取り」『新英語教育１０月号』,高文研, pp.6-9.
前田隆子(2021)「小学校における Small Talk の役割：教員研修における意識調査結果-考察」『明海大学教職課程センター研究紀要』,第四号, pp.59-66.
文部科学省(2018)「高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編」 https://www.mext.go.jp/content/1407073_09_1_2.pdf,（参照 2024-02-01).
山口直美(2024)「発問からはじまる場面づくり」『新英語教育５号』,高文研,pp.26-27.
山崎勝(2024)「リテリング-高校におけるリテリング指導の実際」『新英語教育９月号,高文研,pp.12-15.
蓬澤守(2022)「中間指導って何？」『英語教育１１月号』,pp34-35
渡部良典・池田真・和泉伸一（2011）『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たなる挑戦 第 1 巻 原理と方法』ぎょうせい.
Lampart, M. (2001), Teaching problems and the problems of teaching. London, UK: Yale University
「生徒の英語による発話を引き出す教師と生徒とのやり取り」【授業編】東京都立本所高等学校 https://www.youtube.com/watch?v=8L2i4fLyEh0,(2024-12-20)
【中３外国語】【話すこと[やり取り]】教師の指導力向上に向けた実践例（２）～領域目標 話すこと[やり取り]～笠間市立笠間中学校 第３学年, https://www.youtube.com/watch?v=MQQinrVNV0A&t=6s,(2024-12-20)
文部科学省「読んだことから話すことへ」～埼玉県坂戸高等学校～,https://www.youtube.com/watch?v=n4QPQDLL7vk&list=PLGpGsGZ3lmbCsze5PvMhQ1TS-jXEZKA4f&index=31
【中３外国語】【話すこと[やり取り]】教師の指導力向上に向けた実践例（２）～領域目標 話すこと[やり取り]～笠間市立笠間中学校 第３学年, https://www.youtube.com/watch?v=MQQinrVNV0A&t=637s
高等学校「話すこと［やり取り］」の言語活動を取り入れた「読むこと」の指導（Post-reading activity)茨城県立竹園高等学校, https://www.youtube.com/watch?v=K830V-4_A7Y&t=771s
【高１外国語】【発信力】読んで話して、書くことへ ～パラフレーズを意識させた発信力育成の授業～ 宮崎県立宮崎南高等学校 第１学年, https://www.youtube.com/watch?v=Ve17Seqkig8&t=706s
【中３外国語】【話すこと[発表]】教師の指導力向上に向けた実践例（３）～領域目標 話すこと[発表]～信州大学教育学部附属長野中学校 第３学年, https://www.youtube.com/watch?v=qYvsDCnzbYg&t=5s